

分科会 D

こどもの表現力 — こどもの表現力は環境とどう関係するか

日時：4月24日（日）13:00～14:30

会場：共通教育棟 A 棟 A23 番教室

話題提供者：

浅井俊一（新潟市こども創造センター館長）

隅敦（富山大学人間発達科学部教授）

青山仁（富山短期大学附属みどり野幼稚園園長）

木村健（金沢 21 世紀美術館エディューケーター）

コメンテーター：三輪律江（横浜市立大学国際都市学系）、新田新一郎（プランニング開代表）

司会・コーディネーター：仙田満（環境建築家）

こどもにとってものをつくるあそび、表現するあそびは、こども自身の生きる力の表現として、時代を越えて重要だ。こどもの表現力は取り巻く環境とも密接な関係がある。その関係性について、それぞれの教育や活動領域を通しての考察と展望について述べ、議論した。

浅井さんは、中学の美術教師の経験から、中学生になると 9 割が美術を嫌いになるという状況の中で、感性、理性、技術のバランスのとれた発達のためには、美術教育も変わるべきだと主張された。また学校、家庭、地域をつなぐという点においても、こどもの表現、絵が大きな可能性をもっていると報告された。創造性発揮の潜在的な需要は極めて高く、新潟市こども創造センターは年間 40～45 万人の利用者がある。このような場は今後も大きな可能性があることを報告された。

隅さんは自然の素材、あるものを上手に

扱って表現していこうという造形あそびにおける素材の重要性を強調された。その偶然性、「何かやったら、何か、何かになることを許す」ことの大切さを強調された。若い意欲のある教師を育てることの重要性を指摘された。

青山さんは、豊かな園の自然環境を背景に、こどもの日常的な発見の連続から、表現力の原泉として、自由な空間と時間、仲間と楽しむ、ファンタジーの世界のあそびの 3 つを挙げ、具体的な園活動を紹介された。

木村さんは、こどもスタジオの活動「ちぎってならべて」というあそび、21 世紀美術館という豊かな建築空間での体験や親子一緒に学べる場の重要性を指摘した。

三輪さんからは社会・地域との関係性の適切性についての問題提起がなされ、新田さんからは美術教師の人間くささがこどもに与える良い影響について言及され、はみ出した人間の存在について鋭い評価がなされた。

全体としてこどもと大人、そして空間という関係性が多面的に検討でき、まとめとして、次のような課題が議論された。

- ① あらかじめの意図ではない、結果としての気づきの学習活動の重要性。
- ② 自然の素材は表現力を蓄積するためにはきわめて重要。
- ③ 表現力を育むには、それを支援する技術も必要。
- ④ こどもの表現力を引き出す教育力が重要。
- ⑤ 自然環境も建築環境もこどもの表現力に大きく関係する。（仙田満）

